

神々のパーソナルカラー

神代神楽の神々に見る仮面と装束の色と形

Personal Color of Gods in Japanese Mythology

Design and Color of Masks and Costumes Worn by the Actors of Jindaikagura Performed in Shrine Festivals

岡崎 信雄 Nobuo Okazaki

OKAZAKI Physical Analysis Consulting Office

キーワード：色彩文化、古事記、日本書紀、神代神楽、仮面、装束

Keywords: Color culture, *Kojiki*, *Nihonshoki*, *Jindaikagura*, Masks, Costumes

収穫を終えた晩秋、里山の鎮守の森の氏神を神楽舞台に迎え、五穀豊穡を折り感謝する秋祭り、神楽社中の人々が踊り舞い、神になり鬼となる、極彩色の里神楽が奉納される。島根の大元神楽、石見神楽、出雲神楽、広島芸北神楽、岡山備中神楽など、岡山、広島から島根地域にかけての中国山地の町や村々において、ことのほか盛んである。そのルーツは能狂言と同じ平安時代宮中で執り行はれた御手楽といわれ、能狂言は武家や貴族の庇護を受け幽にして雅なる世界を、里神楽は神にお楽しみいただき、里人もそれにあやかると俗的な信仰に根ざした神事である。里人の老若男女の感性を引き付ける大衆芸能のルーツとも言われている。年毎に執り行われる例祭や、伝統ある古式に則った式年祭が数年毎に執り行われ奉納される。一方、各地の神楽社中が参加し催される競演神楽大会など、神事を離れた観光神楽が盛んとなり静かなブームを呼んでいる。神事から芸能へ、中でも人気の高い芸能舞（演劇風の舞）には、古事記や日本書紀の神話をモチーフとした演目が多い。里神楽の芸能舞に登場する神々の“仮面と装束”の色と形に焦点を当ててみたい。

1. 里神楽の祭祀儀礼

里神楽は神楽舞台を清め、神をお迎えし、神座にお座りいただき、お楽しみいただく神事（儀式）舞と里人が楽しむ芸能舞より構成されるが、出雲神楽、大元神楽、石見神楽、芸北神楽、備中神楽、それぞれの歴史的背景や、地域的特性を異にし、神事舞や芸能舞の構成・内容を特色あるものとしている。

出雲神楽：江戸時代初期、土俗色を排した能形式の佐陀神社奉納神楽が、佐太神能として大成された。出雲神楽はこの流れを引き、海潮神楽、大土地神楽はこれに属する。神事舞「七座の神事」、ついで芸能舞の神能が舞われる。

大元神楽：島根西部、中国山地の大元神に奉

納される。大元神は里山の鎮守の森に鎮座する“野”の神で、土俗的な信仰対象の神である。神事舞は神楽の前段、中段、後段にも舞われ、その間芸能舞が舞われる。託太夫が神懸かりとなり神の声を発する託宣の古儀が継承され、神の存在感を感じさせる奉納神楽である。

石見神楽：島根の浜田地方を中心に島根西部の沿海部に広がる、大元神楽の流れを引く里神楽。沿海部の人々の神への存在感の意識の変化か、神事舞は簡略化され、神がかり託宣神事は行われない。お囃子は太鼓が六調子に対しテンポの速い八調子で、激しい舞と豪華な衣装はショウ化の先端を走る芸能舞と云われる。

芸北神楽：広島県西部の中国山地の地方でさかんな里神楽。島根の石見地方と人的、地理的に近く、神事舞、芸能舞とも石見神楽の強い影響を受けている。

備中神楽：岡山、備中地方の荒神社に奉納される、素朴で、土臭さを感じさせる里神楽である。神事舞「七座の神事」、ついで芸能舞の神代神楽が舞われ、最後に神懸りの託宣神事が行われる。

2. 里神楽の芸能舞に登場する神々

里神楽の芸能舞には記紀神話をモチーフとした、天の岩屋戸の“岩戸（天照大神、天宇受売命、天兒屋命、布刀玉命、手力男神）”、須佐之男命の大蛇退治の“大蛇（須佐之男命、足名椎、手名椎、櫛名田比売、大蛇）”、葦原中国平定の“国譲（建御雷神、事代主神、建御名方神、大國主神）”、小碓命の東伐の“日本武（倭建命、倭比売、東夷）”、“八十神”、“杵”、“八衢”、“熊襲”、“三韓”などがあげられる。一方、記紀神話以外の神話をモチーフとした演目も多い。“塵輪（足中津日子命、塵輪魔王）”、“弓八幡（八幡麻呂、第六天魔王）”、“鐘馗（鐘馗、神）”などである。中でも人気の高い演目、大蛇、岩戸、日本武、弓八幡の神々の仮面と装束を取り上げ

て見たい。

3. 里神楽の仮面

究極の着面芸能、能舞の仮面は様式化され、彩色も古色を重んじる。里神楽の仮面は、男神面、女神面、鬼神面、剽悍面、大蛇面、その他に大別され、その面相は多種多様、地域により、時代により異なる。能面や、追灘面の影響を受けたと考えられる面相の神楽面も多いが、その造形、彩色には自由な発想が感じられ、ローカルな神楽文化の土着性、大元信仰や荒神信仰のアニミズム的信仰が、里人の感性にマッチした、神々のパーソナリティーにふさわしい、多彩な造形と彩色になっている。男神面の面相は、天つ神（体制派、建御雷神）、天つ神（体制内反抗派、須佐之男命）、国つ神（体制派に順応した神、大国主神、事代主神等）、国つ神（反体制派の神、建御名方神、東夷等）等に類型化分類されるが、女神（天照大神、天宇受売命、櫛名田比売）の面相は、能形式の流れを引く出雲系神楽の場合、能面の造形、彩色に近い。他の里神楽では有職雛人形の面相を思わせるものも多い。限取りの彩色は反体制派の男神面や鬼神面に見られるが、京劇や歌舞伎の限取りに見られるような赤は正義と力を、青は邪悪、白は陰険で狡猾、黒は勇猛といった彩色に意味付けされた決まりはない。ローカルな里人の自由な発想が横溢した仮面の造形、彩色が、里神楽の面白さを十二分にたんのうさせてくれる。

4. 里神楽の装束

芸能舞に着用する装束の種類、その文様・色調は、仮面と同様、神々のパーソナリティーを表す重要な要素と考えられるが、能装束や歌舞伎衣装の影響を受けたと思われるものが多い。出雲神楽、大元神楽の神々の装束は能装束の流れを引き、金糸、銀糸を織り込み、紺、紫、朱、黄地の総金欄模様のつややかな色調に彩られた装束が多いが、体制派の神々の地色は紺や紫、反体制派の神々の地色は朱や黄の原色調である。一方、石見神楽、芸北神楽では歌舞伎衣装の影響を受けたと思われる装束の演目が多い。黒の緞子に金糸銀糸の龍、鷹、獅子の文様が浮彫の如く刺繍が施されもので、塵輪、鍾馗などの演目は豪華絢爛、華麗な舞台装束を身に着け激しい舞を繰り広げる。女神の装束は、白または朱衣に朱色袴の巫女装束が多い。

5. まとめ

夜を徹して踊り舞い、神となり鬼となる神楽太夫、仮面と装束を彩る神々のパーソナルカラーが里人の感性を引き付ける。発表にあたり事例の多くを紹介したい。



高千穂神楽



佐太神能



石見神楽



備中神楽

図 1. 八岐大蛇退治の須佐之男命

なお本発表は下記奉納神楽の拝観をもとにし、まとめたものである。祭礼の当番役、神楽社中、氏子の方々に謝意を表したい。

1. 岡山県小田郡美星町三山下田、三宝荒神社、平成 13 年 12 月 1 日夕刻～翌早朝、備中神楽：美栄社
2. 岡山県川上郡成羽町日名、御前神社、平成 13 年 11 月 17 日夕刻～深夜、備中神楽：日名神楽社中
3. 岡山県真庭郡落合町余河内、余河内神社、平成 12 年 11 月 4 日夕刻～深夜、備中神楽：岡山県神社庁神楽部
4. 島根県邑智郡桜江町市山、飯尾山八幡神社、平成 12 年 11 月 2 4 日夕刻～翌朝、大元神楽：市山神友会、神職会、江尾大元神楽保存会（特別奉納）
高千穂神楽：高千穂夜神楽保存会（特別奉納）
5. 島根県浜田市下有福町、大元神社、平成 13 年 12 月 8 日夕刻～翌朝、大元神楽：有福神楽保持者会
6. 広島県高田郡高宮町羽佐竹、山崎神社、平成 12 年 9 月 22 日夕刻～深夜、芸北神楽：羽佐竹神楽団
7. 島根県大原郡大東町、神楽の宿（夜神楽大会）、平成 12 年 7 月 29 日夕刻～深夜、出雲神楽：薦沢神楽社中、佐世神楽社中、海潮中学神楽部
8. 島根県八束郡鹿島町佐陀、佐太神社、平成 12 年 9 月 2 4 日夜、25 日夜、佐太神能：佐陀神能保存会、
9. 島根県簸川郡大社町杵築西大土地、大土地荒神社、平成 13 年 10 月 25 日夕刻～翌早朝、出雲神楽：大土地神楽保存会、吉田村深野神楽保存会（特別奉納）
10. 京都市西京区松尾、松尾大社（節分祭奉納神楽）、平成 13 年 2 月 3 日昼、石見神楽：種神楽保存会

参考資料

岡崎信雄、「八岐大蛇（ヤマタノオロチ）と龍文化 里神楽に見る大蛇の色と形」、平成 12 年度日本色彩学会関西支部大会講演論文集、P36